

学級担任の強みを活かした外国語活動の授業展開

教育実践力高度化コース 19AD003

内田 綾香

【指導教員】 及川 賢 山口 美保 武田 ちあき

【キーワード】 外国語 外国語活動 学級担任 やりがい 強み

1.はじめに

2017年3月31日に文部科学省から小学校学習指導要領が告示された。これに伴い移行措置期間としての平成30～31(令和元)年度では小学校3・4年で年間15時間の「外国語活動」と、5・6年では年間50時間の「外国語」が教えられた。そして今年度からは小学校3・4年で年間35時間(週に1時間相当)の「外国語活動」、5年・6年で年間70時間(週に2時間相当)の「外国語」がスタートした。

文部科学省(2016:44)は外国語(活動)の指導体制に関して「中学年では、主に学級担任が外国語指導助手(ALT)等とのティーム・ティーチングも活用しながら指導し、高学年では、学級担任が英語の指導力に関する専門性を高めて指導する、併せて専科指導を行う教員を活用することにより、専門性を一層重視した指導体制を構築」と述べており、学級担任が中心となることが前提となっている。

学級担任、ALTの特性について文部科学省(2017a:108)は以下のようにまとめている。

【学級担任の特性】

- ・児童一人一人をよく理解しているため、学習指導と生活指導の両面に配慮し、学級の児童の発達段階に応じた内容を設定できる
- ・児童と信頼関係が構築されており、児童が外国語活動や外国語科の授業を担当が担当することに安心感を覚え、リラックスして授業に臨むことができる
- ・全教科等を担当しているため、他教科等での学びを外国語学習に取り入れることができる
- ・英語学習者の一人として、児童とともに英語を使い学ぶ存在である

【ALTの特性】

- ・ネイティブ・スピーカーの発音を聞かせたり、母国の生活や文化等の情報を伝えたりすることができる
- ・児童にとって、学んだ英語を実際に使えるコミュニケーションの相手である

上記の特性を踏まえ、文部科学省(2017a:158-159)では学級担任と専科教員・ALT等の役割を2つに分けて以下のように示している。

【学級担任の役割】

- ①クラスの実態に合わせた活動計画の作成と授業展開を考

える

- ②他教科等との連携を考える
- ③児童へ安心感を与える
- ④コミュニケーションのモデルを示す
- ⑤主に態度面を評価する

【専科教員やALT等の役割】

- ①外国語指導の点から、活動計画と授業展開を考える
- ②英語のインプットを与える
- ③適切なフィードバックを与える
- ④主に「知識・技能」、「思考・判断・表現」の面を評価する
- ⑤異文化理解の点からの指導

これらの役割分担はあくまで文部科学省から示されたものであり、学校現場でこのように分担されているとは限らない。さらには、この分担の場合学級担任と専科教員やALT等が協働して授業展開や内容を考えることが必要となるが、ALTの勤務時間が教員と異なるため放課後等は打合せをすることができない現状もある。昼休み等の休み時間に打合せをすることも考えられるが、休み時間は教員にとって休憩時間ではなく、子どもたちとの関わりや生徒指導など重要な時間である。このような現状を考えた時、現在の指導体制で学級担任、専科教員やALT等が特性を活かし指導に臨んでいるのかどうか疑問である。

各都道府県や市町村の自治体などでは外国語指導の研修や指導力に関する事業も盛んに行われている。しかし実際に文部科学省が示した役割分担を基にした指導体制をどの学校も取っているかは地域や学校の実態が異なるので、すべての学校で取ることができているとは考えにくい。また、現在の指導体制で学級担任自身が自分の強みを認識しているのか、認識したうえでやりがいを感じているのかについての議論はあまりされてきていない。実際に著者は教職大学院の現地研究実習で公立小学校での実習を行ったが、多くの教員が多忙化のあまりやりがいを実感する以前に日々の業務等を終えることに追われている印象であった。

文部科学省(2013)では「教職員が心身ともに健康を維持して意欲的に職務に取り組み、やりがいを持って教育活動を行うことが重要である」と述べられている。では、教員はやりがいをもって外国語の指導に臨んでいるのだろうか。また、やりがいをもって指導に臨むためにはどのような要素が必要なのだろうか。やりがいをもって授業に臨むこと

ができていのかどうかは、小学校外国語教育の質の向上に関係する重要な要素の一つであるはずである。

本研究においては以下の3点を研究の目的とする。

- ・小学校の外国語の授業において、学級担任の「よさ」に対する実際の認識はどうなっているのか明らかにする
- ・小学校の外国語の授業において、学級担任はどのような課題を感じているのか明らかにする
- ・小学校の外国語の授業において、どのような要因がやりがい意識に関連するのか明らかにする

それらを明らかにすることで、学級担任、専科教員、ALTそれぞれが、チームティーチングにおいてどのような役割分担をすることが望ましいのか、強みを活かした教育体制の構築の一助となることを目指す。なお、「外国語」及び「外国語活動」で実施されている科目ではあるが、実際には英語が扱われているので、便宜上本稿では総称して「英語」を用いる。

2. 先行研究

学級担任の特性、課題について実際学校現場でどのように認識されているかみていく。萬谷 (2019) では学級担任と専科教員のどちらが小学校の英語指導をする上で望ましいか335名の小学校教員(現在学級担任:252名、現在専科等教員:67名)に質問紙調査を行った。学級担任を望む理由としては「担任教師は児童との相互信頼があるから」が85.07%、「担任教師はより深い児童理解があるから」が83.58%、「担任教師は指導内容・方法を児童に合わせやすい」が82.84%となり、児童との関わりで学級担任の特性として「よさ」を感じているようだ。一方で専科教員を望む理由としては「専科教師は英語指導技術があるため」が91.50%、「専科教師は十分な英語力があるため」が89.50%と指導力の部分で特性として「よさ」を感じているようだ。その他の理由としては「専科教師は準備時間に余裕があるため」が83.50%、「担任教師が多忙であるため」が83.00%と教員の多忙さの視点からの声も多い。

及川 (2019) では質問紙調査の中で小学校教員が英語指導を行う際に無理なくできることを調査した。機器を使用する活動や「英語で挨拶をすること」「英語で指示を出すこと」といったルーティン活動は比較的難しくないと感じているようだった。一方、言語活動を作成したり実施することや英語力が必要となる活動は難しいと感じているようだ。

次にやりがい意識についてみていく。小学校の英語指導において学級担任のやりがいと関連した総括的な研究は多くはされてきていない。一方で、ALTに特化したやりがい意識に注目した研究がある。

園田・尾関 (2020) はALTを対象にして研究を行っている。吉田・清水・和泉・狩野他 (2017) の回答を用いて、小学校外国語活動に携わるALT655名のアンケート結果を分析した。結果として、ALTが自分の強みを活かされていると感じるやりがい意識をもって教育に携わる上で、一定期間の研修や学校現場での豊かな交流、意思疎通が鍵となる

ことが示唆された。また、ALT自身の属性や能力はやりがい意識と関係しないことが示された。ここで言う属性や能力とはALTの日本語力や日本滞在歴、日本語力のことを指している。一方で、学校とALT間の意識のすりあわせができてきていること、日本人教員とのコミュニケーションや児童との英語での交流が関係していることが分かった。

これらはあくまで相関関係を示したものであり因果関係を論ずることはできないが、ALT自身の能力ではなく周囲の環境や体制構築がやりがい意識に関係があるということは重要な視点と言える。

英語指導ではないがやりがい意識に焦点を当てると、中條 (2020) は特別な支援学校と小学校の教員を比較して特別支援教育に対するやりがいを促進する要因を検討した。特別支援学校の教員の特別支援教育に対するやりがいは、情報提供やアドバイス、物資的な支援といった道具的サポートや自己有能感によって高まることが示された。小学校の教員の特別支援教育に対するやりがいは管理職からの道具的サポートにより高まることが示された。具体的には学校レベルでの特別支援教育に関する知識や情報の提供や研修等のサポートを指している。そのため特別支援学校の教員に対しては同僚と協働して支援を促進、小学校の教員に対しては特別支援教育に関する知識や情報の提供や研修の実施が必要であると考えられる。

これらの結果は調査対象が1校という単一事例であることを考慮しなければならないが、やりがいを促進する要因は教員の能力だけではないことが分かった。周囲の支援体制が必要であるという点は園田・尾関論文、中條論文ともに共通していると言える。

現状において、小学校教員の英語授業に対してやりがい意識はどのようになっているのか、またその要因について知る必要がある。

3. 研究方法

3-1 目的

本調査は、①小学校の外国語の授業において、学級担任の「よさ」に対する実際の認識はどうなっているのか②小学校の外国語の授業において、学級担任はどのような課題を感じているのか③小学校の外国語の授業において、どのような要因がやりがい意識に関連するのかを明らかにすることを目的とする。

3-2 予備調査

- ・実施時期 2020年11月
 - ・対象者 A県B市の小学校教員2名
 - ・質問項目 ①教員の属性等に関すること②英語授業を指導する上でのやりがい意識に関すること③英語授業を指導する上での課題に関すること④英語授業を指導する上で学級担任にとっての望ましい環境に関すること
- 予備面接の結果を踏まえ質問の表現を整えたが、大きな変更はなく本調査を実施した。

3-3 質問紙調査対象者

A 県 B 市の小学校教員 35 名に質問紙を配布した。質問紙には Web で回答可能なフォームの URL と QR コードもつけており、回答者がどちらかを選択して回答できるようにした。なお、質問紙、Web での回答のどちらも質問内容は変わらない。このうち、研究を行っている C 小学校から 19 名の回答をいただいた。C 小学校はかつて市の研究指定を受け外国語の研究をしていた学校である。C 小学校とは別地域で学校規模が類似する D 小学校からは 16 名の回答をいただいた。最終的には 35 名分のデータが対象となった。

3-4 質問項目

過去の文献等を参考に 8 つの質問を用意した。大枠は以下の通りである。①教員年数②現在の担任学年③外国語の指導年数④中学校または高等学校の英語の免許の有無⑤学級担任が TT で外国語の授業をする「よさ」⑥学級担任の「よさ」は学校現場でどのくらい活かしているか⑦学級担任が外国語の授業を TT で進める上で、さらにできたらよいこと⑧学級担任が外国語(活動)の授業で無理なくできること これらの質問には数値や 4 件法で、⑦のみ記述式で回答いただいた。4 件法では、もっとも肯定的な回答を「4」、もっとも否定的な回答を「1」とし、「活かしている」から「活かしていない」の 4 つを選択肢として用意した。なお、⑧の質問に対しては現在学級担任をされている先生にのみ回答していただいた。

このうち⑤が学級担任の「よさ」に関する質問、⑥がやりがい意識に関する質問、⑦⑧が学級担任が今後身に付けたいと感じている課題意識に関する質問である。

3-5 調査時期

2020 年 11 月～12 月実施

3-6 分析方法

分析方法は質問により異なる。

4.結果

質問項目の内容と実際の質問文及び結果を以下に掲載する。質問文は原文通りだが、類似する質問との違いを明確にするために下線を施している文がある(原文にも下線を施している)。コロン直後の数字がそれぞれの度数、カッコ内の数字が全体におけるパーセンテージを表している。

【教員の属性等】

4-1 教員年数

「教員年数(臨時的任用を含む。産休・育休期間など実際に授業を担当していなかった期間は除いてください。また、1年に満たない期間は切り捨てて計算してください。例:5年半→5年のア)」

0～5年:12(34.3%) 21～25年:4(11.4%)

6～10年:7(20.0%) 26～30年:2(5.7%)
11～15年:8(22.9%) 31～35年:0(0%)
16～20年:2(5.7%) 36～40年:0(0%)

今回の回答者の半数が教員年数が10年以下であった。

4-2 現在の担任学年

低学年:11(31.4%)
中学年:9(25.7%)
高学年:9(25.7%)
その他(専科教員を含む):6(17.1%)

今回の回答者は低学年の担任が若干多いが、中学年・高学年は同程度の割合であった。

4-3 小学校における外国語の指導年数

0～5年:16(45.7%) 11～15年:6(17.1%)
6～10年:11(31.4%) 16年以上:2(5.7%)

今回の回答者は指導経験が5年以下が5割近くで、全体的に経験年数が少ない集団であった。一方で経験年数が11年以上は2割程度にとどまった。

4-4 英語の教員免許

「中学校または高等学校の英語の免許をおもちですか?」

もっている:6(17.1%) もっていない:29(82.9%)

英語の教員免許を有している教員の割合は17.1%であった。及川(2019)が行った調査における結果である4.4%と比べるとやや高い結果となった。しかし今回の調査で「もっている」と回答した6名のうち半数は教員年数が10年以下であった。中学校または高等学校の英語の免許を取得していると教員採用試験の受験で加算を受けることができる自治体があることや、小学校英語の教科化に向けた専門性向上のための講習等で、現役小学校教員を対象に、英語免許を取得できる認定講習が開かれている自治体もあったことから、今後免許を取得した教員の数は増えていく可能性がある。

【学級担任のやりがい意識】

4-5 学級担任の「よさ」

「学級担任が TT で外国語の授業をする「よさ」は何だと思えますか?(複数回答可)」

児童の性格や環境などをよく理解していること:30(40.0%)
児童の実態を踏まえた上で成績をつけること:9(12.0%)
児童の特性や苦手な部分を踏まえて支援をすること:28

(37.3%)
 外国語以外の授業と関連付けた教科横断的な授業をすること : 8 (10.7%)
 その他 : 0 (0%)

予備調査で出てきた「よさ」以外の意見に関しては本調査において出てこなかった。児童に直接的に関わることに關しては「よさ」として感じているようだが、教科横断的な授業をすることといった授業の構成を考えることを学級担任の「よさ」として捉えている教員は多くは無かった。

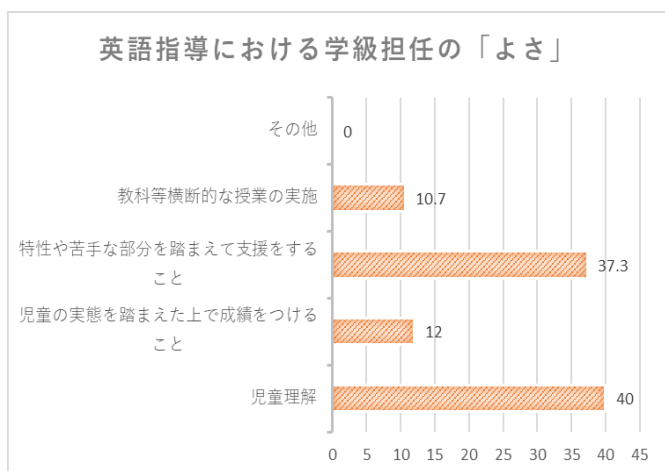


図1 英語指導における学級担任の「よさ」

4-6 やりがいの実感の程度

「①で伺った学級担任の「よさ」は学校現場でどのくらい活きていると思いますか？」

活きていない : 0 (0%)
 どちらかと言えば活きていない : 3 (8.6%)
 どちらかと言えば活きている : 25 (71.4%)
 活きている : 7 (20.0%)

母集団が少ないことを考慮する必要があるが、約 9 割の教員がやりがいを実感できていることが分かった。

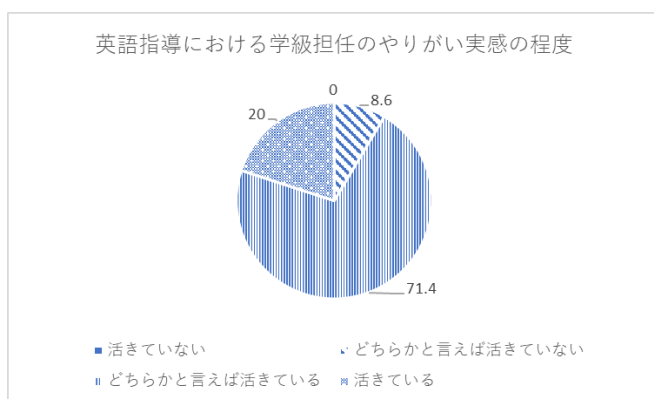


図2 英語指導における学級担任のやりがい実感の程度

次にやりがい意識と教員の属性等との関連をみていく。測定データの変数間の相関関係は、ピアソンの積率相関係数を用いて分析した。

- (1) 教員年数とやりがい意識 : $r = -.010$
- (2) 外国語指導年数とやりがい意識 : $r = .162$

係数の数値が小さいため、上記 2 つの属性はやりがい意識との間に相関はないと考えてよい。

次に中学校または高等学校の英語の免許取得の有無と現在の担任学年がやりがい意識と関連をみていく。カイ二乗検定を行い分析した。

- (1) 中学校または高等学校の英語の免許 : $\chi^2(1) = 1.17, p = .28$
- (2) 現在の担任学年 : $\chi^2(3) = 5.30, p = .15$

よって上記 2 つの属性はやりがい意識との間に統計的有意さは認められなかった。

【学級担任の課題】

4-7 課題

「あなたが学級担任として外国語の授業を TT で進める上で、さらにできたらよいことは何ですか？キーワードでも構いません。専科の先生方は、学級担任だった場合を想定していただきお答えください。」

収集した回答は 47 件だった。回答者数は 35 名であるが、自由記述のため 1 人で複数の回答をしている場合もある。ユーザーローカルのテキストマイニングツールを用いてワードクラウドを実施した (<http://textmining.userlocal.jp/>)。ワードクラウドは文章中で出現頻度が高い単語を複数選び出し、その頻度に応じた大きさで、名詞、動詞、形容詞を図示する方法である。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を表している。

ワードクラウドでは (図3)、名詞は「打合せ」が最も大きく表示され、さらに「ALT」「GST⁽¹⁾」「確保」などが続いた。多くの教員が十分な打合せを実施できていないことを課題と感じていることが分かった。実際の回答では「しっかり打合せできていないなら専科の方に授業をしてもらった方がスムーズだと思う」という声もあり、打合せ時間の確保は急務であると考えられる。打合せの次に多く挙げられた「ALT」において「ALT とのコミュニケーション」「ALT との英会話」を課題として挙げている声も多かった。打合せをしようとしても ALT と英語でコミュニケーションを取ることが難しいと感じている教員もいるようだ。

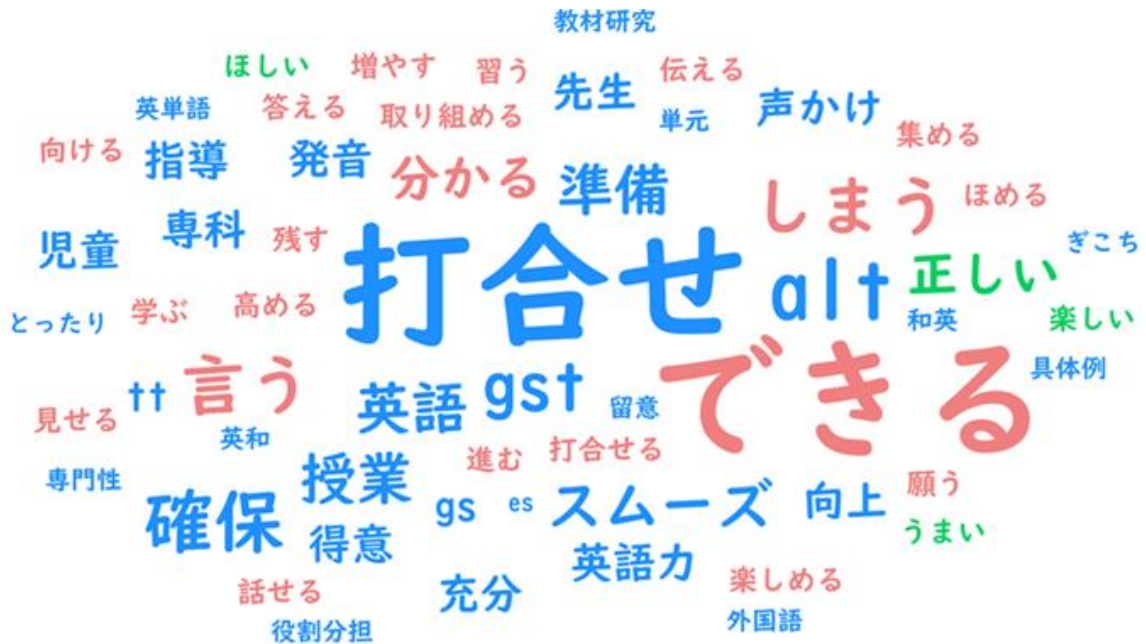


図3 ワードクラウド

次に共起キーワードを見ていく。共起キーワードとは文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図のことで、出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画される。

図4より、読み取ることができる点は主に5点ある。

- ①【英語発音力の向上】「発音」「正しい」「話せる」という単語のまとまりから、「英語発音力の向上」と名付けた。実際の回答では「正しい発音で話せる」「正しい発音で言ったり聞きとったりしてGSTとスムーズにやりとりできること」といった教員自身の発音力を心配しての声が多かった。
- ②【専門性の向上】「専門」「向上」といった単語のまとまりから「専門性の向上」と名付けた。ここでの「専門性」とは教員自身の教科に対する知識教養と定義する。実際の回答では「専門的な能力向上」「英語力の向上」といった声があった。ここでの専門性は具体的に何を指すのかまで分析することはできなかったが、①と区別して英語全般に関する専門性の向上として捉える。
- ③【指導力の向上】「英語」「楽しめる」「ほめる」「伝える」「分かる」「うまい」「声かけ」といった単語のまとまりから「指導力の向上」と名付けた。ここでの「指導力」とは子どもたちに対する教え方のスキルと定義する。実際の回答では「英語を習っていない・不得意な児童も楽しめる」「英語でほめることを言える英単語・文を増やす」「分かる子・得意な子だけで進まない授業」といった声があった。ここでは教員の英語に関する知識というよりも、子どもたちに対するフィードバックや声かけに関する声が多かった。

- ④【授業における役割分担】「役割分担」「指導」「留意」「残す」といった単語のまとまりから「授業における役割分担」と名付けた。実際の回答では「指導及び評価における役割分担」「指導案や反省点、留意事項を入れたものを残す」といった声があった。まず授業において学級担任、ALTや専科教員との役割分担を明確にすることが必要と考えられる。その上でうまくいったこと、反省点、留意すべきこと等を次の年度でも活かすために文書等で残すことが必要であると考えられる。短い打合せ時間を経て何かしら役割分担をしながら授業を進めているはずではある。しかしその役割分担がどうだったのか客観的に考え、修正することは多忙化の中難しいと考えられる。文書等でうまくいったこと、反省点、留意すべきことを残し、次年度以降の英語授業の体制を検討するというサイクルをまずは学校内で作るが必要と考える。
- ⑤【打合せ時間の確保】「打ち合せる」「ほしい」「専科」「願う」といった単語のまとまりから「打合せ時間の確保」と名付けた。ワードクラウド(図3)でもある通り、多くの先生が打合せ時間を確保できていないことを課題として感じていることが示されている。また打合せ時間を確保できていない背景として多忙化等様々な要因が考えられるが、実際の回答では「現状ではGSTとの勤務時間の都合等で打合せができない、それゆえにTTの良さが半減してしまう」といった声があった。

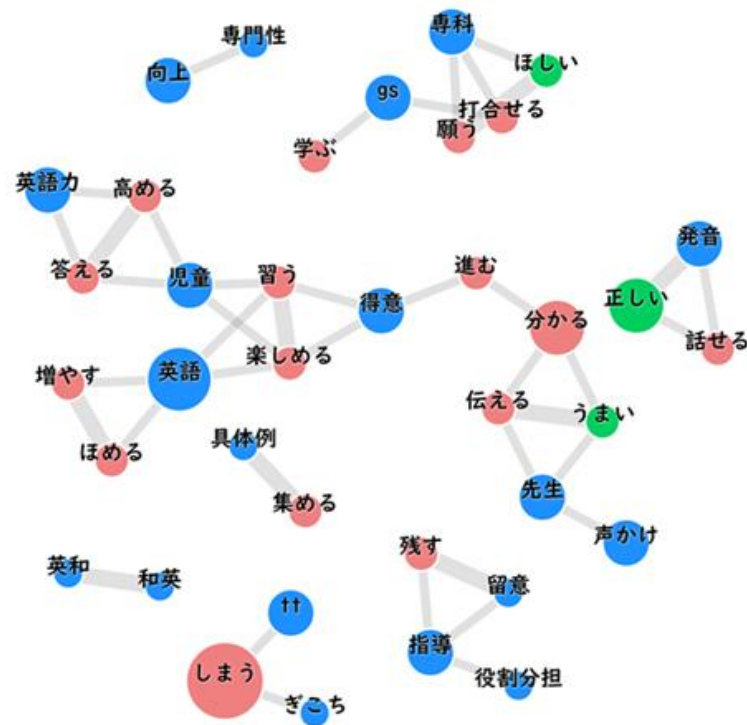


図4 共起キーワード

【学級担任にとっての望ましい環境】

4-8 無理なくできること

「学級担任が外国語（活動）の授業で無理なくできることは何ですか？（複数回答可）」

- 英語であいさつをすること：28（25.5%）
- ”Let’s play a game!”のようにタイトルコールを英語ですること：25（22.7%）
- ”Sit down please.”のように英語で指示を出すこと：25（22.7%）
- 英語で行う活動を実施すること：8（7.3%）
- 英語で行う活動の内容を考えること：3（2.7%）
- 英語で行う活動を準備すること：2（1.8%）
- 英語でのスキットをすること：2（1.8%）
- 文法など英語の規則について説明すること：5（4.5%）
- 児童の成績をつけること：5（4.5%）
- 絵本の読み聞かせをすること：1（0.9%）
- 英語の発音モデルを示すこと：2（1.8%）
- ALTと打合せをすること：3（2.7%）
- その他：1（0.9%）

英語であいさつ、英語で指示を出すといった教員自身が英語を使う活動については無理ない範囲でできると考えているようだ。一方で授業の内容構成に関することや英語の専門知識が必要とされる文法、発音の指導に関する部分は無理ない範囲でできると考えている教員は少ないことが分かった。本研究では英語の教員免許を持っている教員の割

合は多くない（17.1%）ので、英語を専門に学んでいない教員にとっては専門知識を必要とする指導はハードルが高く感じるようだ。

5.考察

5-1 学級担任の「よさ」に対する実際の認識

今回の調査では学級担任が英語の授業をする「よさ」として、子どもたちと実際に関わる児童の性格や環境などをよく理解していることや児童の特性や苦手な部分を踏まえて支援をすることが多く挙げられた。これらに次いで児童の実態を踏まえた上で成績を付けること（12.0%）も「よさ」として挙げられた。今年度は外国語が教科化され、実際に評価をした先生方の意見が調査結果に反映されたと考えられる。米崎他（2016）では教科化への不安の中で「何をどう評価したら良いのかわからない」「自分が評価できるかわからない」といった評価への不安が、及川（2019）では高学年の評価に対する不安の中で最も小さい不安であった「実施のための時間と場所を確保すること」でも平均値 2.14 となっていた。先行研究の段階では文部科学省や各自治体から具体的な方針が出る前だったためか、評価に対する不安が漠然としたものだったと思われる。今回の調査では実際に評価を経験し、学級担任が評価をすることに対して「よさ」を感じていることから、評価に対する不安はそこまで大きくはなく、否定的要素ではないということが示された。

5-2 学級担任が感じる今後の課題

図4より2つのまとまりで学級担任の課題を捉えることができる。1つは①【英語発音力の向上】②【専門性の向上】③【指導力の向上】を合わせた指導力に関すること、もう1つは④【授業における役割分担】⑤【打合せ時間の確保】を合わせた指導体制に関することである。先行研究の米崎他(2016)では教科化・低学年化に対する共通する不安として教員の英語力・指導力、国語や他教科とのバランス、児童の負担・混乱の3つを挙げている。教員の英語力・指導力は本調査でも課題としてあげられているものであり、未だ払しょくされていないことを示す結果となった。教育行政に求めることとしては、継続的な英語力・指導力向上のための研修は必要であると考えている。

一方で指導体制は、教科化され実際に教科書を使って授業をし、評価も行ったからこそ、やってみて分かった課題だと考えられる。今回は打合せ時間確保を課題と感じる要因までは特定できていないが、教員の多忙化とは切り離せない関係にあると考えられる。実際に「現状ではGSTとの勤務時間の都合等で打合せができない、それゆえにTTのよさが半減してしまう」という声は、学級担任、ALT等のよさをお互いに活かす上で打合せは必要であることを表していると言える。さらに、「しっかり打合せできていないなら専科の方に授業をしてもらった方がスムーズだと思う」という声もあるが、学級担任や専科教員それぞれの「よさ」等を検討する以前に専科教員を望んでいるものであり、専科教員が配置される理由が単に教員の多忙化を救うため存在として学校現場で捉えられてしまう危険性があると考えている。萬谷(2019)では専科教師を望む声は多忙化を背景とした消極的理由が含まれていると示されており、この状況や教員意識を建設的にみる必要がある。専科教員の「よさ」を活かすという積極的理由が今後の指導体制について議論していく上で重要である。短時間の打合せを可能とするために、打合せカード等を用いて事前にアジェンダを決めるといった工夫も可能だろう。しかし、学校現場の努力だけで打合せ時間の確保が可能となるとは考えにくい。小学校英語の教科化以外にも小学校教員は多くのものを抱えており、それらを学級担任のマンパワーに頼りながら日々をこなしているという話も聞く。教員1人が解決できるような問題ではないのである。本調査では多くの教員が打合せ時間の確保を切実に望んでいることが分かった。ここから先は行政レベルで、勤務時間内に打合せ時間を確保できるようにすべきである。

5-3 やりがい意識に影響を与える属性

今回の調査では、経験年数、小学校における外国語指導歴は学級担任のやりがい意識との間に統計的有意な相関は見られなかった。先行研究の園田・尾関(2020)と同様に教員自身の能力や属性とやりがい意識は関連性がないことが示された。

今回の分析はやりがい意識とその他の要因との間の相関

関係を探ったものであり、因果関係を論ずることはできない。しかしながら、学級担任がやりがい意識をもって外国語の授業をするにあたって、教員年数、小学校での外国語指導歴、担任学年や中学校または高等学校の英語の免許取得の有無はやりがい意識と関連がないことが示された。指導の経験が長ければやりがい意識が高くなるというわけでは無いようだ。

5-4 学級担任の「よさ」を活かした指導の提案

英語指導において、学級担任の「よさ」である児童理解や苦手な子の支援といった子どもたちと直接関わる役割が必要であると考えている。これにより英語に苦手意識がある子ども、低学年の子どもに対して学級担任がいるからこそその安心感を与えることができる。日々子どもたちと真剣に向き合って授業等で関わっている教員は、英語の能力に関わらずこの「よさ」を活かすことができるはずである。

その次の段階として、授業内容や単元計画を考えることが挙げられる。この中に教科等横断的な授業の考案も含まれるだろう。クラスの実態に応じて授業を作ることはもちろん学級担任の「よさ」である。しかし、それはクラスの実態を把握している、かつ英語授業の経験、知識等が「よさ」の実感につながるようだ。学級担任だから子どもたちのことは何でも分かる、だから授業も作ることができるということにはならないのである。よって授業内容や単元計画作成については現段階では、専科教員や英語免許等をもって教員が中心となって授業内容や単元計画を進め、学級担任は子どもたちのサポート等に焦点を当てることと考えられる。学校によっては地域の実態等も違うことで専科教員がいない所もあるだろう。英語に苦手意識をもたない教員が中心となって授業をできるよう、外国語などの一部の教科を教科担任制で担当することも考えられる。

今後英語免許を取得している小学校教員も今後は増えていくだろう。さらに現在小学校教員の免許を取得する大学1、2年生は英語教育に関係する授業を必修で学んでいる。そのような教員が増えた時に初めて、授業内容や単元計画を考えることも学級担任の役割となり、「よさ」として感じる教員も増えるかもしれない。

6.終わりに

本調査では学級担任の「よさ」を中心に、小学校外国語の指導体制について議論してきた。調査対象となった教員が35名という母数の少なさが課題としてあるため、小学校全体を一般化した結果とは言い難い。引き続きどのような指導体制が望ましいのか、また子どもたちの目線ではどうなのかといった議論を続けていく必要がある。

現在の小学校教員の英語指導の際の指導力における課題は、教員免許を取得する際に英語が入っていなかったという過去の制度的な問題と、小学校の英語教育導入を研修制度等が整う以前に始めてしまった、という現在の制度的問題が根底にある。教員の努力を支援することにももちろん意

味はあるが、それだけで根本的な解決には至らないだろう。教育行政に教員が望むことと教育行政の側の支援、この両者はうまく対応しているのかを長期的かつ定期的に評価することも本研究の範囲を超えて小学校の英語教育を考えていく上で必要であると考えられる。

註

(1) GS とは A 県 B 市における独自の外国語活動・外国語である「Global Studies」の略称であり、ここでの GST は外国語活動・外国語の授業を中心に担当する教員の「Global Studies Teacher」のことを指している。

7.参考文献

- 及川賢 (2019) . 「小学校外国語に対する教員の不安と今後の研修に向けての提言」 . 『埼玉大学紀要教育学部』 68 (2) ,465-485.
- 大谷みどり (2014) . 「小学校外国語活動の「いま」と「これから」の課題—島根県教員へのアンケート調査結果をもとに—」 . 『島根大学教育学部紀要 (教育科学) 』 48,1-10.
- 菅原純也・ホール・ジェームズ・小田誠・大森有希子・金子裕輔・市川あゆみ・久慈美香子・高室敬 (2019) . 「小学校外国語科・外国語活動における CLIL の単元開発『岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集』 6,103-108.
- 園田敦子・尾関はゆみ (2020) . 「小学校における ALT のやりがい意識-強みが活かされている実感を持てる学校現場とは-」日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 40 回秋季研究大会資料
- 中嶋彩華・久坂哲也 (2020) . 「小学校教員の理科指導に対する不安,教師効力感,学習動機の検討」『日本教育工学会論文誌』 44 (1) ,1-9.
- 中條水貴 (2020) . 「教員の特別支援教育に対するやりがいを促進する要因の検討」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』 21,35-44.
- 町田智久・高橋規子・黒川美喜子 (2017) . 「ティーム・ティーチングを生かした学級担任の基礎的英語力向上の取組み」『小学校英語教育学会誌』 17(3),102-117.
- 文部科学省 (2013) . 「教職員のメンタルヘルス対策について (最終まとめ)」
- 文部科学省 (2016) . 「小学校における外国語教育の充実に向けた取組(カリキュラム、教材、指導体制の強化)」
- 文部科学省 (2017a) . 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 旺文社
- 文部科学省 (2017b) . 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)』 東洋館出版.
- 文部科学省 (2017c) . 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語活動・外国語編』 開隆堂出版.
- 吉田研作・清水崇文・和泉伸一・狩野晶子他 (2017) . 「小学校・中学校・高等学校における ALT の実態に関する大

規模アンケート調査研究最終報告書」上智大学.

https://www.bun-do.co.jp/aste/alt_final_report.pdf

- 米崎里・多良静也・佃由紀子 (2016) . 「小学校外国語活動の教科化・低学年に対する小学校教員の不安-その構造と変遷-」 JES Journal 16.132-146.小学校英語教育学会.
- 萬谷隆一 (2019) . 「小学校英語における担任教師・専科教師についての教師の意識調査」 . 『北海道教育大学紀要』 70 (1) ,165-174.